

## 〈新刊紹介〉

○ 高等学校の国語教育に関する研究文献は、小・中学校のそれにくらべて、きわめて少ない。ここでは、昭和三十四年以後の国語教育研究文献のうち、高等学校の国語教育を対象にしているもの二種と、直接対象にはないが、おおいに参考になると思われるもの一種とをとりあげて紹介したい。

### I 高等学校作文指導の手引

（大阪府教育委員会指導課編著

A5判 222ページ 非売品

昭和34・3・31 同課発行）

### II 高等学校国語教育研究論文目録

（広島大学教育学部国語教育研究室

編 本文95ページ 索引24ページ 非売品

昭和35・8・5 同研究室発行）

### III 国語教材研究講座（全六巻）

（倉沢 榮吉、滑川 道夫、飛田多喜雄、増淵恒吉 編集

A5判 各約300ページ 480～550円

昭和34・9・20～昭和35・4・20 朝倉書店発行）

○ Iは、大阪府教育委員会指導課と大阪府高等学校国語教育研究会との共同研究によってなったもので、「府下高校国語教育界の総力を結集」（まえがき）した力作・力作である。全体は大きく二部に分かれる。第一部では、一 高等学校における作文教育のあり方、二 作文指導の基準と計画、三 作文指導の方法、四 作文の処理と評価について、おのおの①指導の問題点②指導の実際③参考資料の三項に分けて述べられている。第二部は、一 国語教科書と作文教育、二 文法と作文教育、三 古典と作文教育、四 文芸と作文教育、五 生活指導と作文教育、六 大学入試と作文教育、七 就職試験と作文教育となっており、第一部同様 ①指導の問題点②指導の実際③参考資料の三項に分けて述べられている。さらに付録として、一 府下高等学校作文実態調査——表記の面について、二 参考書目がつけられている。第一部は、いわば原理編ないし、総論にあたり、第二部は、実践編ないし各論にあると見られる。しかし、第一部といえども、実態調査や実践体験などをふまえて、具体的に実践的に述べられている点

で、単なる一般論・抽象論とはその趣を異にしている。たとえ「一高等学校における作文教育のあり方」などは、とかく抽象論におおしいやすい問題であるが、本書では、各種の立場（教科作文の立場、生活作文の立場等々）を各書ききままとめたるうえ、「新入生の作文能力はどれくらいか」「作文学習に対する生徒の一般の態度はどうか」などといった、きわめて実践的・具体的な問題を、調査資料をそえて、簡潔に述べている。このように、本書は、多くの問題を網羅していながら、それが単なる抽象論におわらず、実践的・具体的・実践的である点に特色をもっているかと思われる。この特色は、「何とかして作文教育の振興をはかりたい、それには、なるべく実践的な手引書を作りたい。」（あとがき）という意図にそって、「現場の作文指導の悩みの中から何かを引き出して行く」（編集後記）という方針で本書が編まれたことによるのであろう。いずれにしても、本書にみられるような、大がかりな、しかもこまかな作文実態調査やその分析は、個人の力ではおおよびがたいことであろう。こうした意味で、本書は、高校作文教育の「実践的な手引書」「便利な資料集」としてはもちろん、組

續のもつ機動力をじゅうぶんに發揮し、共同研究のよさを生かした研究書としても、注目すべき文献と言えよう。

○ Ⅱは、新制高校の国語教育の実践と研究に關する論稿（中に、随想の類をも含む）など、およそ一六〇〇点を類別集成した目録である。分類項目は、A 国語教育一般、

B 学習指導、C 調査報告、D 国語学力・評価、E 教材研究、F 実践報告、G 研究授業・研究会報告、H 教壇随想、となっており、おのおのがさらにくわしく分類されている。分類項目によって想像されるように、この目録では、かなり広範圍に、いわゆる論文以外のものも収集されている。「国語年鑑」はもとより、各種研究紀要・機関誌にもあたって収集につとめているので、一般にあまり知られていないものも、この目録によって知ることができる。

「さくいん」は、「筆者名さくいん」と「作者名 作品名さくいん」とからなり、この目録をじゅうぶんに活用できるように配慮されている。所収雑誌（紀要）の発行所一頁がつけられていることも親切である。なお、この目録作成は、もと、广大教育学部国語科の

「国語教育研究法」（昭和34年度）の調査集習の一つとして企画され、野地先生の指導のもとに、その作業・整理を文獻調査班（当時の国語科四年生）が担当し、後、大学院および学部学生が増補・整理した。この方面のこの種のものとしてははじめての試みではあり、多くの制約をうけて、いまだじゅうぶんとはいえないにしても、こうしたものがないにだけに、利用者にはよろこばれよう。活用のしかたによっては、この目録だけからでも何かを引き出せそうに思われる。

○

Ⅲは、現行小・中学校国語教科書の中からいくつかの教材をえらび出し、そのひとつひとつに教材研究を加えたもので、一巻から四巻までが小学校、五巻と六巻が中学校となっている。余巻を通じて、教材研究の柱はほぼ一定している。第五巻（文学的教材と）を例にとると、一、作品の研究（1 主題、2 作品の機構、3 表現の特質）、二、指導の研究（1 学習者の反応、2 指導の目標、3 指導すべき能力、4 指導上の留意点）のようになっている。これについて、編者は、「本講座の刊行にあたっては、新指導要領の線に副った教材研究の基本的な性格を究明するとともに、ど

のような項目によって執筆するかの検討を十分にしたつもりである。」（まえがき）と述べている。こうした教材研究の柱のたてかた以外に、一々の論稿からは多くのことを学ぶことができる。一例をあげてみる。第六巻の中の「三年の教材、論文を書く4指導上の留意点」の(4)である。筆者は大村はま先生。

(4) 問題によっては、ときどき乱暴な意見に出ることがある。そういう場合は、いきなり、その意見に対して、正面から指導者の意見を述べず、ことばの不適當なところを探して、そのことばの浮いているところやニュアンスのちがいを一つ一つ指適するのがよいと思う。その後、本論に触れてもよし、触れなくてもよし、多くの場合、触れないでしぜんに考えかたそのものの方向を変えることができるようである。」(136頁)

これだけをとってみても、どんな多くのことを考えさせられることか。熟読玩味すべき論稿の一つである。他の筆者の論稿についてはふれる余裕がないが、同様に学ぶべき点の多いことをつけ加えておきたい。（大槻）